

季寄せ—草木花

夏上

選・監修 中村草田男
写真 富成忠夫
解説 本田正次



季寄せ——草木花〔夏・上〕

朝日新聞社編

定価 一八〇〇円

発行 昭和五十五年四月一日第一刷

昭和五十五年四月十日第二刷

発行者 朝日新聞社 波多野公介

発行所 東京 名古屋 大阪 北九州 朝日新聞社

印刷所 凸版印刷株式会社

©朝日新聞社一九八〇

季寄せ―草木花

選・監修

中村草田男／写真

富成忠夫／解説

本田正次

朝日新聞社



選・監修 中村草田男

写真 富成忠夫

解説 本田正次

植物画 佐藤達夫

例句選 雨宮昌吉

岡田海市

北野民夫

香西照雄

貞弘 衛

宮脇白夜

装幀
レイアウト 多川精一

題字 川口芝香



春〔上〕



春〔下〕



夏〔上〕



夏〔下〕



秋〔上〕



秋〔下〕



冬

お読みになる前に

●このシリーズは、七巻（秋上・下・冬・春上・下・夏上・下）で構成しており、この巻は夏の上です。

●夏は立夏（五月五日ごろ）から立秋（八月八日ごろ）まで。季節のわけ方は従来の歳時記に準拠し、開花の時期などが大幅に違うものは解説にそれを説明しました。

●季語は草、木、花に限定しましたが、一部なじみの深い菌、藻も植物季語として含まれています。

●季語の配列は、東京を中心に花や実を見るのが早い順とし、たとえば一夏中咲いている花などはその咲き始めの時期をとり、本田先生に配列していただきました。

●季語は俳句でよく知られているものを主見出しとし、別名、異名、方言名、古名などを併記しました。見出し季語の右側に現代かな、左側に旧かなをつけ、別名などは現代がなに統一しました。

●例句は原作通りとし、かなづかいは原作に従いました。漢字は原則として新字体とし、新字体のないものは旧字体にしました。

●例句のルビは、原作についているものはそのまま生かしました。読みやすくするために編集部でつけたものもあります。

●解説は植物の標準和名に統一しました。季語と植物解説との見出しが一致しないのは、解説は正しい植物名で、季語は俳句でよく使用されている呼び名を優先的に採用したためです。

●植物名の漢字は論議の多いところですが、できるだけ漢字で表記し、従来よく使用されているものの、明らかに間違っているものは除外しました。

●例句は季語にふさわしい句を収集、選句したものをともに、各巻の監修選者がさらに編集に合わせて選びました。

●例句は古典は名（号）だけ、現代俳句は姓名とし、配列は、原則として古典を先にしましたが、必ずしも年代順ではありません。

●季語索引には夏上と夏下とを合わせ夏全体の季語をのせました。

目次

若葉／9	桐の花／30	一つ葉／54	石菖／76
青羊歯／11	アカシアの花／33	椎の花／55	昼顔／77
破れ傘／11	白丁花／33	蜜柑の花／56	水芭蕉／78
草苺／12	苺／34	紫陽花／58	大山蓮花／80
二人静／12	忍冬の花／35	柿の花／60	杜鵑花／80
罌粟の花／14	とべらの花／37	梔子の花／61	槐の花／82
竹の皮脱ぐ／16	踊子草／37	榊の花／62	余花／82
蛇苺／17	えごの花／38	卵の花／62	菩提樹の花／84
海芋／18	酢漿の花／40	棟の花／64	青桐／85
鉄線花／19	新樹／40	早苗／65	玫瑰／87
著莪の花／21	夏柳／43	合歓の花／66	岩菲／87
鳶尾／21	新緑／44	野茨／68	芍薬／88
牡丹／22	芭蕉の花／45	さびたの花／69	沙羅の花／89
繡毬花／24	苔の花／46	木斛の花／70	杜若／90
金雀枝／25	病葉／48	棕櫚の花／71	溪蓀／92
葉桜／26	若竹／49	石榴の花／73	花菖蒲／92
花水木／27	夏草／51	ねずみもちの花／73	薔薇／95
朴の花／28	草茂る／51	葎菜／74	萍／96
栃の花／29	栗の花／53	靱草／75	浅沙の花／97



蘭の花／98

筍／109

繭の花／112

ガーベラ／116

菱の花／99

朝顔の苗／109

蓮の浮葉／113

金魚草／116

藻の花／101

山葵の花／109

水草の花／113

飛燕草／117

金魚藻／101

カーネーション／110

蓴菜／113

小判草／117

河骨／103

常磐木の落葉／110

白根葵／114

南瓜の花／117

真菰／104

青芦／110

白山一花草／114

薤／118

太藷／105

篠の子／111

えぞにゅう／114

パセリ／118

沢瀉／106

青芝／111

常夏／115

玉葱／118

蒲／106

青葉／111

玉簾の花／115

睡蓮／108

青莧／112

スイートピー／115

石竹／116

花前線＝アジサイ——大後美保／6

ホタルブクロ——佐藤達夫・画／119

現代俳句と季語および写生——中村草田男／120

夏蜜柑のことなど——草間時彦／123

歳時記昔々——橘麒之／126

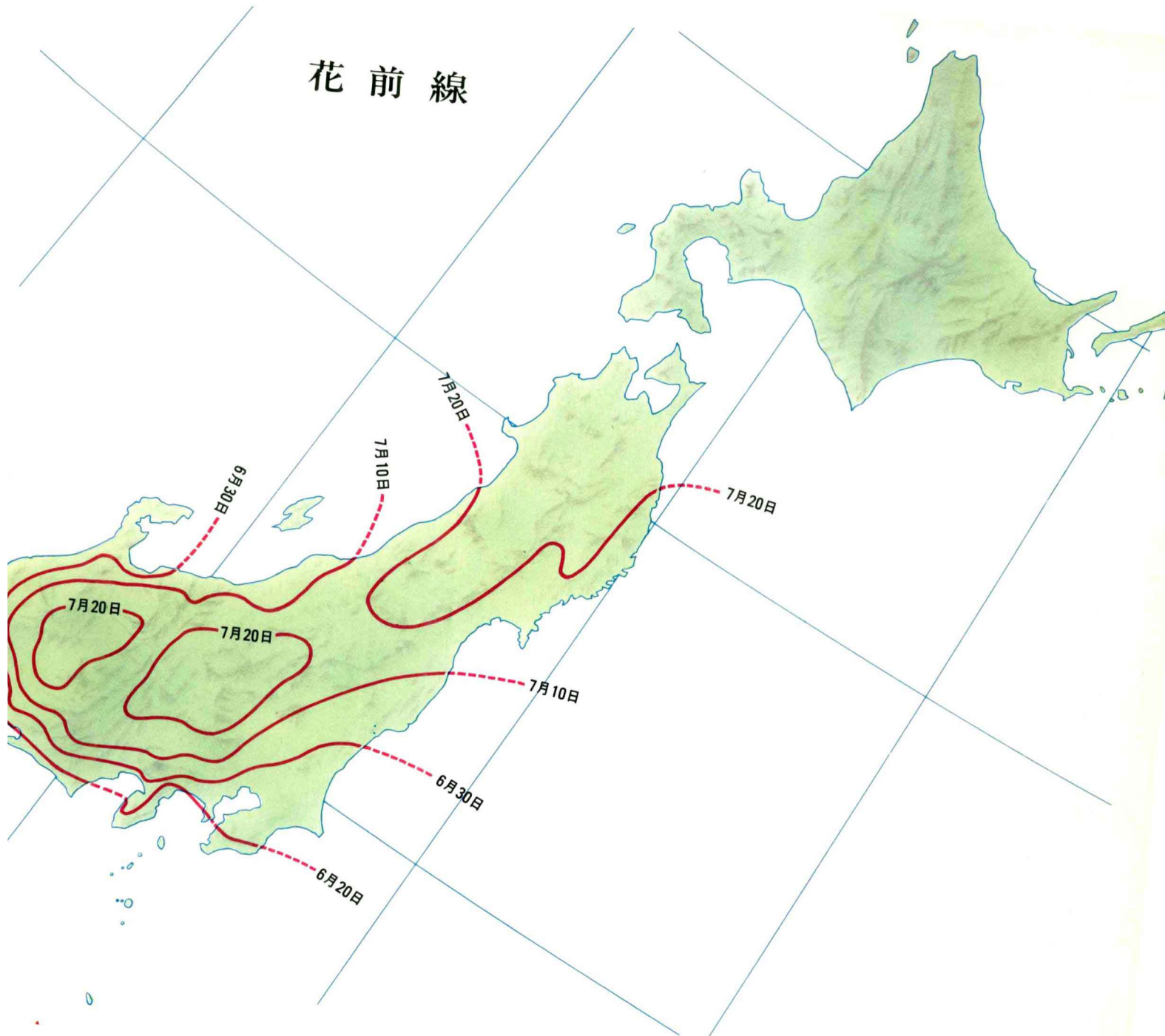
歳時記と植物俳句——長谷川真魚／132

植物語源考⑥——植物の和名と総称名——清水建美／134

索引／139

編集ノート／143

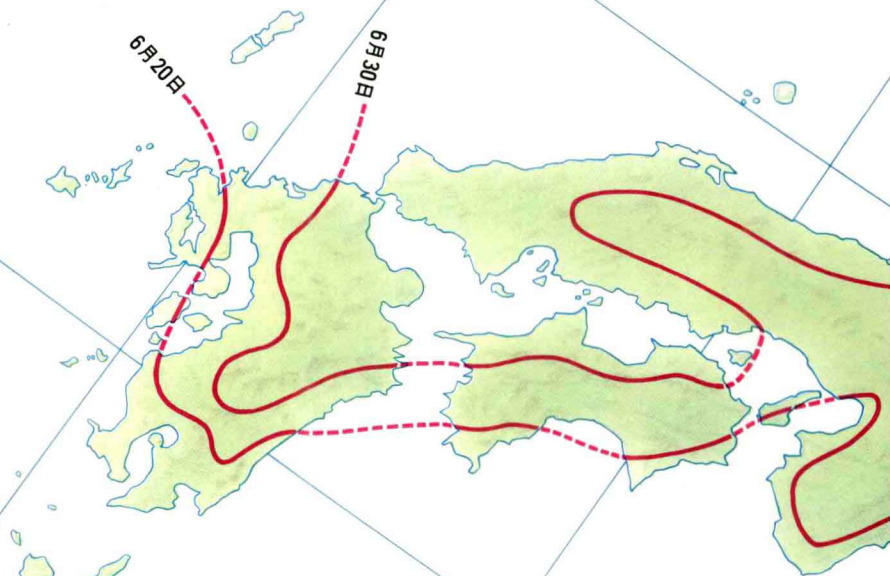
花前線



アジサイ

アジサイは陰湿なところを好む。

野生のものは多くは藪かげ、森の下などに生えている。このためかアジサイが咲きはじめるのは入梅の時からである。梅雨前線が西日本に上陸する六月の初めころから咲きはじめる。梅雨前線の北上とともに開花前線も北上し、六月末には東北地方に到達する。開花してから満開になるまでの期間は、西日本では三十日くらいもあるが、北に進むほどこの期間は短縮し、東北地方では十日くらいとなる。盛花期の寿命はわりあい長く、二―三週間もあり、さらに花が見られなくなるには一カ月もかかるから長く花を楽しむことができる。清廉で淋しさをおぼえる花なのに花言葉に、高慢、法螺吹き、威張屋などがあるのは解せないことだ。







若葉わかば

谷若葉 里若葉 山若葉 庭若葉 窓若葉
 若葉風 若葉雨 若葉晴 若葉曇 樟若葉
 柿若葉 朴若葉 蔦若葉 椎若葉 檉若葉 若楓

若葉して御めの霽ぬぐはゞや

芭蕉

絶頂の城たのもしき若葉かな

蕪村

若葉して手のひらほどの山の寺

夏目漱石

樟若葉塗りこめしごと谷の家

香取佳津見

身を休め雲仰ぐ媼若葉坂

波辺幻魚

柿若葉嬰兒明るき方のみ見る

鎌田容克

父の代の風が吹きをり柿若葉

高橋沐石

柿嫩葉一事厳しき父で通す

奈良文夫

若楓一降り降つて日が照つて

来山

若楓枝を平らにうち重ね

富安風生

若楓琴のごとくに橋置かれ

加賀美子麓

〔若葉〕

落葉樹はもちろん、常緑樹でも、また高木低木を問わず初夏はとりどりの木がつややかな緑の葉を伸ばして、その清新な装いを凝らす時である。これが若葉であり、新樹、新緑も同じであるが、若葉は総合美にも単一美にも両様にとられる。谷若葉、里若葉、山若葉、庭若葉、窓若葉など大小の風景がそれぞれ美しい季節となり、また若葉風、若葉雨、若葉晴、若葉曇、若葉寒など氣象に合わせた若葉も生きた季節となる。さらに柿若葉、樟若葉、朴若葉、蔦若葉、椎若葉、檉若葉、若楓などその他木の名を知っていれば何でも独立した季節になって面白いだろう。

若葉は人が眺めたり、またそれを俳句や詩歌に詠んで楽しんだりするだけでなく、昆虫なども若葉を食餌にしたり、卵を産みつけたりするので、動物たちにとっても、ありがたいものに違いない。



あおしだ
青羊歯
あをしだ

青歯朶

晴れあがる雨あし見えて歯朶明り

室生犀星

山に来てもなほ毒舌者歯朶青し

北野民夫

やぶがさ
破れ傘

やぶれがさむらがり生ひぬ梅雨の中

水原秋桜子

〔青シダ〕

青シダという名の植物はないが、冬に葉が枯れ、春になって若葉を出し、夏の間、青々と葉を広げているシダの仲間のことを、色彩に敏感な俳人はそういうのであろう。お馴染みの、ワラビもゼンマイも、もちろんこの仲間に入るが、これらは俳人のいう名草の類に入るのだろうか、おそらく青シダという総括的な名ではいわないだろう。写真はオニゼンマイ。

〔ヤブレガサ〕

本州、四国、九州の雑木林などに野生するキク科の多年草で、高さは一メートル近くになる。茎は直立し、葉が掌状に深く裂け、破れた傘を思わせるのでこの名がある。





草苺

くさいちご
早生苺

死火山の膚つめたくて草いちご

飯田蛇笏

草苺朝の赤さや歌の中

加藤知世子

濡れ髪^{かが}の妻が跣むや草いちご

星野麦丘人

一人静

ふたりしずか
ふたりしづか

道のべやふたりしずかに山の蝶

石川桂郎

〔クサイチゴ〕

山野でふつうに見られるバラ科の小低木。ちよつと見たところ草のようであり、名は草イチゴだが、実態は「木イチゴ」。花は白色の五弁花で直径約三センチ。四、五月ごろ枝先に一個つける。夏に果実が赤く熟して食べられる。ワセイチゴ、ナベイチゴの別名もある。

〔フタリシズカ〕

センリョウ科の多年草で、同科のヒトリシズカより草姿は大きい。五月ごろ、葉の間から二本の白い花穂を立てるのでこの名が生まれた。実際には、三、四本、ときに五、六本も花穂を立てることがあり、静かどころではない。





罂粟の花

芥子の花 鬼罂粟 薊罂粟 罂粟坊主
雛罂粟 虞美人草 麗春花

散り際は風もたのまずけしの花

其角

芥子咲けばまぬがれがたく病みにけり

松本たかし

罂粟ひらく髪の先まで寂しきとき

橋本多佳子

緋芥子散る北のあを空支へ切れず

平井さち子

芥子坊主こつん／＼と遊ぶなり

田村木国

芥子坊主再会の後またと逢はず

西尾砂穂

ひなげしの曲りて立ちて白き陽に

山口青邨

ひなげしの花びらたたむ真似ばかり

阿波野青畝

〔ケシの花〕

ケシ科に属する一年草または二年草で、畑に栽培する。地中海地方東部の原産であるが、日本へは中国を経て渡来した。高さ一から二メートル、茎は太くて直立、葉は互生し、もとのほうは茎を抱き、緑白色をしている。初夏のころ、茎頂に一個の大きな美花を開く。蕾の時は下を向き、緑色の二枚の萼片があるが、花を開くと上を向き、開花と同時に萼片が落ちるので、花は開いた時だけ見れば萼片がないように見える。花弁は四枚、色は白、紅、紫その他いろいろある。

ケシの果実は子房の頭が平たいので、その形から俗にケシ坊主といわれるようになった。白い花をつけるケシの未熟な果実に傷をつけると、白い汁が流れ出るが、この汁を集めてかためたものが阿片である。これには毒があるから、ケシは法律によって栽培が禁止されている。和名のケシは、昔これに芥子の字を用いたので、その音読みである。漢名を罂子粟、または罂粟という。

ヒナゲシは江戸時代に渡来し、草花として広く庭園に栽培されているヨーロッパ原産のケシ科の二年草。高さ五十センチ内外、茎は弱々しいが直立し、羽状に分裂した葉を互生している。葉は細長く、鋸歯があり、茎とともに粗毛がある。初夏のころから開花、蕾の時は下を向くが、開けば上を向く。萼には毛があり、花を開けば脱落する。花弁は四枚、広い円形をなし、色は常に真つ赤であるが、白や桃色もあり、また八重もある。漢名を麗春花、虞美人草というが、特に虞美人草の名は日本でも用いられている。単に美人草ともいわれるが、みな花が優しくて美しいからであろう。ケシと違って阿片がとれないので、自由に栽培できる。写真は右がケシの花とケシ坊主、左はアイスランド・ポピー。

